

■開催概要

- シリーズ名称 : 2023 鈴鹿サンデーロードレース第3戦
- 主催 : ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.821km)
- 参加台数 : 総参加台数/246台

CBR250R Dream Cup.....	41台
CBR250RR Dream Cup.....	26台
ST600R (Revival).....	19台
インターJP250.....	6台
ナショナルJP250.....	21台
インターJ-GP3.....	13台 (内、HRC NSF250R Challenge... 3台)
ナショナルJ-GP3.....	14台 (内、HRC NSF250R Challenge... 10台)
インターJSB1000.....	17台
インターST1000.....	10台
ナショナルST600.....	41台
インターST600.....	9台
ナショナルST1000.....	29台
- 開催日 : 2023年9月9日(土)、10日(日)
- 天候/路面 : (9日) 晴れ/ドライ、(10日) 曇り一時雨/ドライ→ウェット→ドライ

★次回レース予定

2023 鈴鹿サンデーロードレース第3戦

■開催日/2023年11月18日(土)、19日(日)

■会場/鈴鹿サーキット フルコース (5.821km)

■開催クラス/インターJSB1000、インター/ナショナルST1000・ST600・J-GP3・JP250、ST600R (Revival)

■主催/ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット



★レースリザルトはインターネットでご覧いただけます。
https://www.suzukacircuit.jp/result_s/



★レース写真は、バトルファクトリー様のHPで
ご購入いただけます。
<http://www.battle.co.jp/>



「CBR250R/ CBR250RR Dream Cup」の2カテゴリーでは「DUNLOP杯グランドチャンピオンシップ2023」が併催された。(写真) CBR250R Dream Cup決勝グリッド

今季最終戦となったカテゴリーもあり、 いつも以上に熱いバトルが展開された第3戦

5月20日(土)、21日(日)に開催された鈴鹿サンデーロードレース第2戦から数えること約3か月半。まだまだ暑さが残る9月9日(土)、10日(日)の2日間に渡り、2023年シーズンの鈴鹿サンデーロードレース第3戦が行われた。

初日の9日(土)は全カテゴリーの公式予選と「CBR250R/ CBR250RR Dream Cup」の決勝レースが行われた。今年からビギナークラスとエキスパートクラスが統合され、レース名称も統一された「CBR250R Dream Cup」、そしてそのステップアップカテゴリーである「CBR250RR Dream Cup」が今シーズンの鈴鹿サンデーロードレース内で行われるのは今回が最後。どちらのカテゴリーでもシリーズチャンピオンを獲得すべく予選から激しいタイムアタック合戦が展開され、決勝でも抜きつ抜かれつの熱いバトルが披露された。また、普段は全国のサーキットでこれらのカテゴリーのシリーズ戦を戦っているライダーが参戦した「DUNLOP杯グランドチャンピオンシップ2023」が併催されたこともトピックだった。

「CBR250R Dream Cup」では開幕戦で優勝を飾り、第2戦を2位で終えている大田雅裕が3位フィニッシュしてチャンピオンに。また、「CBR250RR Dream Cup」の予選では前戦の予選でコースレコードを更新し、決勝をポールトゥウィンで終えた田中直哉が2分32秒415をマークしてレコードをさらに更新。その田中が今回の決勝でも圧倒的な強さを披露したが、なんとファイナルラップで転倒。細谷匠が優勝を飾り、逆転チャンピオンに輝いた。

翌10日(日)は「ST600R (Revival)」の決勝レースから始まった。このカテゴリーの決勝は雨が降ってきたことにより、3周目終了時点で赤旗が出されて中断。リスタート後に雨が強くなり、再度赤旗が出され、仕切り直して行われたレースでも転倒者がコース上に残ったことにより、三度目の赤旗が出される。もう一度仕切り直したレースではドライタイヤをチョイスした増田利幸が逆転優勝を決めた。なお、11月18日(土)、19日(日)に行われる鈴鹿サンデーロードレース最終戦ではこのカテゴリーの決勝は18日(土)に開催される。

「インターJSB1000/ ST1000」と「ナショナルST1000」の決勝ではリッタースーパースポーツならではの迫力あるバトルが展開された。国際ライセンスホルダーを対象とする「インターJSB1000/ ST1000」は特に注目度が高かった。

開幕戦に55台、第2戦に60台が参戦と、いつも多くの参戦台数を集める「ナショナルST600」には今回41台が参戦。予選では少しでも前のグリッドを獲得しようと激しい展開に。決勝でもファイナルラップの最終コーナー立ち上がりまで各選手がしのぎを削った。

次戦は「NGKスパークプラグ杯」という大会名称で呼ばれる最終戦。全カテゴリーのシリーズチャンピオンが決まるこの一戦にも是非ご期待いただきたい。



今シーズンが最終開催年であることが発表されている「ST600R (Revival)」。何度もレースが仕切り直されるという波乱の末に増田利幸が優勝を飾る結果となった

■CBR250R Dream Cup

予選では中沢寿寛が唯一の2分43秒台となる2分43秒666をマークしてポールポジションを獲得。その中沢が絶妙なクラッチミートを披露するが、2番グリッドスタートの戸高 綸太郎が中沢を交わしてトップに。中沢、4番グリッドスタートの大田雅裕と続く。S字コーナーで中沢が戸高をパス。すぐに戸高がトップに返り咲くと、戸高、大田、中沢のオーダーでオープニングラップを終了し、秀崎隆、林規夫、入江高伸がそれに続く。後続を引き離し始めた戸高の後方で大田と中沢がテールtoノーズのバトルを展開。4周目の西ストレートでその3台が再び接近し、その後もバトルを繰り返したが、戸高がトップチェッカーを受けた。



CBR250R Dream Cup表彰式 (優勝：戸高 綸太郎、2位：中沢寿寛、3位：大田雅裕)



CBR250R Dream Cup DUNLOP杯グランドチャンピオンシップ2023表彰式
(優勝：戸高 綸太郎、2位：中沢寿寛、3位：大田雅裕)

■CBR250RR Dream Cup

前戦の予選でコースレコードを更新した田中直哉が今回の予選では2分32秒415をマークし、さらにレコードを更新する。その田中がスタート直後から後続を引き離しにかかる、後続に3秒438ものアドバンテージを築いてオープニングラップを終了。2周目終了時点では6秒757、3周目終了時点では10秒247と、周回ごとにタイムギャップを拡大する。その後方では細谷匠も単独2番手に。さらにその後方で小牧寛由、谷川壮洋、仲泉霞皇、岩月寿樹、福井宏至、辻本範行がテールtoノーズのバトルを展開する。トップを独走する田中がファイナルラップのデグナーでなんと転倒。細谷が優勝を飾るとともにチャンピオンに輝いた。



CBR250RR Dream Cup表彰式(優勝:細谷匠、2位:小牧寛由、3位:谷川壮洋)



CBR250RR Dream Cup DUNLOP杯グランドチャンピオンシップ2023表彰式(優勝:細谷匠、2位:谷川壮洋、3位:辻本範行)

■インター／ナショナルJP250

ナショナルJP250の前田誠司が予選で総合トップタイムをマークしてポールポジションを獲得。その前田が良いクラッチミートを披露する。それに続くのは2番グリッドスタートの久川鉄平、3番グリッドスタートの藤田武蔵の2台。前田がオープニングラップから後続を引き離しにかけ、前田、久川、藤田のオーダーでオープニングラップを終了する。久川、藤田も単独2番手、単独3番手に。6番グリッドスタートの南博之が4番手まで順位を回復する。南が藤田に接近。久川も前田のテールを捉えると、5周目のデグナーでトップに。その後もテールtoノーズの状態で行進を続けたその2台のバトルを久川が制することとなった。



インターJP250表彰式(優勝:中川涼、2位:辻本範行、3位:船田俊希)



ナショナルJP250表彰式(優勝:久川鉄平、2位:前田誠司、3位:藤田武蔵)



ナショナルJP250車両銘柄賞表彰式(Honda賞:前田誠司、ヤマハ賞:久川鉄平、カワサキ賞:清水善久)

■インター／ナショナルJ-GP3／
HRC NSF250R Challenge

高橋直輝が前戦に続いてポールポジションを獲得。今季2連勝を飾っている松田基成が2番グリッドに並ぶ。高橋と松田が横並びの状態です。4番グリッドスタートの仲村瑛冬がその2台の間に割って入るが、高橋と松田がオープニングラップで3番手以降を引き離すことに成功。その後方で針尾大治郎、岡田陽大、仲村らが3番手グループを形成する。岡田と豊田哲慎がテールtoノーズのバトルを展開。3周目のメインストレートで松田が高橋をパスしかけるが、順位は変わらない。単独3番手となった岡田が高橋、松田のトップ集団に加わるが、ファイナルラップで松田と絡んで転倒。高橋がトップチェッカーを受けた。



インターJ-GP3表彰式 (優勝: 高橋直輝、2位: 仲村瑛冬、3位: 吉田忠幸)



ナショナルJ-GP3表彰式 (優勝: 中谷健心、2位: 徳田翔、3位: 豊田哲慎)

■インターJSB1000／ST1000

マシントラブルのため、インターST1000のポイントリーダー澤村元章が予選アタックできず、最後尾スタートに。予選の最後の最後で羽根巧を逆転した遠藤晃慶がポールポジションからのスタートとなる。その遠藤の背後、4番グリッドからスタートした加藤高史がホールショットをゲット。加藤、羽根、山中将基のオーダーでオープニングラップを終了する。羽根が加藤にプレッシャーをかけ続ける一方、山中は若干遅れる。山中が4周目にその時点でのファステストラップとなる2分12秒947をマーク。次の周では加藤がそのタイムを上回る2分12秒573をマークする。しかし、羽根がファイナルラップで逆転し、総合優勝を飾った。



インターJSB1000表彰式(優勝:羽根巧、2位:加藤高史、3位:山中将基)



インターST1000表彰式(優勝:可部谷雄矢、2位:大貴貴彦、3位:吉原匡徳)

■ナショナルST1000

ポールポジションを獲得した中尾泰三がスタートで出遅れる。ホールショットを奪ったのは2番グリッドスタートの樽見隼。樽見はオープニングラップから後続を引き離しにかかるが、転倒したマシンが複数台あったことにより、赤旗が出されてレースは中断。リスタート後のクラッチミートでは樽見が竿立ちウィリー状態になって転倒。それと接触したマシンから白煙が出たことにより、再び赤旗が出される。6周によって行われたその後のレースでは中尾と戸谷健司がバトルを展開したが、戸谷、中尾の順に転倒。赤旗が出されてそのままレースは終了。その2台が5分以内にピットレーンに戻ってこなかったため、村田司の優勝が決まった。



ナショナルST1000表彰式(優勝:村田司、2位:小寺正明、3位:塩野仁史)

■インターST600

松永修、村瀬豊、福田琢巳が予選でアタック合戦を披露。終盤に2分18秒769をマークしたKavin Quintalがポールポジションを獲得する。そのQuintalと2番グリッドスタートの松永が横並び状態で1コーナーへ。Quintalがホールショットを奪う。松永、Quintal、鈴木慎吾のオーダーでオープニングラップを終了。オープニングラップでミスして6番手まで順位を落とした3番グリッドスタートの村瀬は4番手で2周目を帰ってくる。トップグループを形成する松永、Quintal、鈴木の中で鈴木がQuintalのテールを狙う。鈴木がQuintalと松永を立て続けにパスしたが、ファイナルラップで逆転したQuintalがクラス初優勝を飾った。



インターST600表彰式(優勝:Kavin Quintal、2位:鈴木慎吾、3位:松永修)

■ナショナルST600

予選ではランキングリーダーの平城雄飛がアタック開始から好タイムをマーク。ポールポジションからスタートした平城がホールショットを奪う。それに続くのは3番グリッドスタートの川本宜論。平城、川本、服部亮我らによるトップグループから平城と川本が抜け出すことに成功する。服部の後方で中堀拓己、楠留維、小野拓也が3位グループを形成。中堀と楠が服部をパスする。川本と中堀は4周目にレース中の自己ベストを更新。川本は5周目に2分17秒866のファステストラップをマークし、6周目のヘアピンで平城をパスする。その後もその2台によるバトルは続いたが、平城がトップチェッカーを受け、2連勝を果たした。



ナショナルST600表彰式(優勝:平城雄飛、2位:川本宜論、3位:中堀拓己)

■ST600R (Revival)

3度赤旗が出されたことにより、仕切り直しとなって昼のインターバル後に行われたレースでは5番グリッドスタートの山口直哉がホールショットをゲット。中出敏克がその山口をパスするが、オープニングラップで転倒したマシンが複数台あったことにより、赤旗が出されてレースは中断される。リスタート後は中出がホールショットをゲット。それに榊原健二、山口と続く。山口と小松孝章が榊原をパス。中出が後続を引き離しにかかるが、その中出に山口が接近。抜きつ抜かれつのバトルを展開する中出、山口、小松、榊原のトップグループにドライタイヤを選択した増田利幸が加わる。4周目にトップに立った増田が優勝を飾った。



ST600R (Revival) 表彰式(優勝:増田利幸、2位:小松孝章、3位:榊原健二)

Voice
of
Pick up
Riders
-SUNDAY EDITION-

この日、キラリと光った
ライダーに一问一答

この日、キラリと光ったライダーに一问一答
「Voice of Pick up Rider -SUNDAY EDITION-」

インターJSB1000で優勝した

羽根 巧 選手

(TEAM AGRAS with NOJIMA / Honda CBR1000RR-R)



Q. 公式予選では途中までトップタイムでしたが、最後の最後で抜かれて総合2番手でした。

A. 実は決勝用のセットを出せていなかったため、ロングラップを試みている途中で電子制御のセッティングを変え、アタックしました。トップタイムを出せて喜んだのですが、次のラップでコントロールタワーを見てみたら2番手に落ちていて残念でした。アタックして早めの段階でタイムを出せるようになったのは良かったと思います。

Q. 決勝レースではファイナルラップでトップに立ち、そのままチェッカーを受けましたね。

A. 早めに前に出てその後ズルズルと後退してしまうレースが続いたので、今回は最後の方で前に出ようと考えていました。そのため、加藤高史選手の背後について、ペースを使わせてもらいました。考えていた通り、ファイナルラップで前に出ました。

Q. 今シーズンは開幕戦、第2戦と連続して3位でした。ついに勝ちましたね。

A. ようやく勝つことができました。次回の最終戦ではポイントランキングももちろん気になりますが、今回に続いて優勝することに集中して戦いたいと思います。